



Title	第6 回 ウィリアム・モリス研究会
Author(s)	
Citation	デザイン理論. 2022, 80, p. 114-116
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89284
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

第 6 回 ウィリアム・モリス研究会

2021 年 12 月 18 日（土曜日）14：00～16：30

オンラインにて開催

スケジュール

開会の言葉：横山千晶／慶應義塾大学（14：00～14：05）

■研究発表 1（発表 14：05～14：40，質疑応答 14：40～14：55）

「モリス商会と Dovecot Studios — マートン・アビーとスコットランドのタペストリー制作」／
横山千晶（慶應義塾大学）

■研究発表 2（発表 15：00～15：35，質疑応答 15：35～15：50）

「ウィリアム・モリスとフランク・ロイド・ライト」／藤田治彦（大阪大学）

（休息 5 分）

■参加者によるディスカッション（15：55～16：25）

「疫病の時代とモリス，そして芸術のゆくえ」

閉会の言葉：藤田治彦／大阪大学（16：25～16：30）

閉会

主催：意匠学会

（研究会報告）

第 6 回ウィリアム・モリス研究会は，第 5 回に引き続きオンラインでの開催となった。

今回は，ウィリアム・モリス（William Morris, 1834-1896）の研究者のみならず，芸術やデザインなどに興味のある方々にも声をかけることで，40 名以上の専門領域を超えた人々が集まった。少しでも対面の研究会に近い形式を求めて，二つの発表の後にディスカッションの場を設けることで，専門を超えた参加者同士の話し合いが可能となった。

以下その内容について報告する。

1. 「モリス商会と Dovecot Studios — マートン・アビーとスコットランドのタペストリー制作」
（横山千晶）

最初の発表では，ヴィクトリア朝のタペストリー文化を振り返り，その中にモリス商会を位置づけた

うえて、商会の技術がやがてエジンバラのダヴコット・スタジオに引き継がれ、新たなタペストリー文化のけん引力となって今に至る様子が跡付けられた。

ウィリアム・モリスがモリス商会にてタペストリーの制作を導入したのは、商会が開設された1861年からすでに20年がたった1881年のことである。ケルムスコットにてモリスが取り組んだ最初のタペストリー、『アカンサスとぶどう』は、1879年5月に制作を開始し、516時間半をかけて9月に仕上げられた。この取り組みで商品化に向けての自信をつけたモリスは、ステンドグラス部門の徒弟であった19歳のヘンリー・ダール（John Henry Dearle, 1859-1932）に技術を伝授し、その上達ぶりを見極めたのち、1881年初めにあらたに二人の少年を徒弟として雇い入れ、商会のタペストリー制作をマートン・アビーにて本格的に始動することとなった。

しかし、19世紀のイギリスにはマートン・アビーのタペストリー工房とほぼ同時期に開設された今一つのタペストリー工房があった。ロイヤル・ウィンザー・タペストリー工房（1876-1890）である。王室の庇護を受けたこの工房は、フランスから職人とその家族を呼び寄せて開設され、工房が作られたオールド・ウィンザーの村は職人たちのコロニーとなっていた。そして初期のタペストリーのシリーズ、『ウィンザーの陽気な女房たち』は1878年のパリ万国博覧会で、本家フランスの並み居るライバル工房を押しのけて金メダルを受賞するという快挙に出た。モリス商会でタペストリーの制作準備を進めていたモリスがライバル意識を募らせていたことは想像に難くない。

ロイヤル・ウィンザーの工房はイギリス人の徒弟をほとんどとらず、イギリス人のアーティストによるデザインとフランスの職人の技術をもとにタペストリーを制作していた。その一方でモリス商会のタペストリーは、それまでの商会の商品であったステンドグラスやテキスタイルの技術を土台として、テキスタイルの頂点としてモリス自らが地道にその技術獲得に取り組み、徒弟たちを育てることで制作を継続させるという点で、ロイヤル・ウィンザーとは一線を画していたといえる。また技術の点でも二つの工房は異なる技法を使った。ロイヤル・ウィンザーの工房は、床に対して水平に織っていく臥機ねばたの手法を取ったが、マートン・アビーでは織機の前に鏡を置いて、縦糸の間から鏡を見つつ裏面から機を織るたてばた堅機たてばたの手法を採用した。

ロイヤル・ウィンザーの工房が15年を経ずして閉鎖に追い込まれた状況からも、タペストリー部門を成功させるうえで商会が学ぶべき点は多かったと思われる。また、ロイヤル・ウィンザーの閉鎖と同時にそこで働いていた織工たちの中にはモリス商会に雇われるものもあり、商会がロイヤル・ウィンザーの技術から学ぶところもあったことだろう。

マートン・アビーでは積極的に10代前半の男子たちを徒弟として雇っていた。彼らはダールの下で制作しながら技術を身につけていったのである。また商会はロイヤル・ウィンザー工房の取った時給や日給の制度ではなく、商品の仕上がりに対して給料を払うという方式を取っていたが、この方法も一連の作業に職人たちが携わるというシステムに貢献したことだろう。

やがてはこれらの徒弟の中からダールの後継者として親方になる織工や、タペストリーの制作や修復に携わり、イギリスのタペストリー文化を担っていく織り手たちが輩出されることになる。新たに設立されたスコットランドのダヴコット・スタジオ（Dovecot Studios, 1912-）を担う職人たちも、そのようなシステムの中で育成されていった。マートン・アビーのゴードン・ベリーとジョン・グラスブルックは1911年の終わりにダヴコット・スタジオに招聘された最初の織り手であった。今もダヴコット・スタジオはモリス商会の教育法を引き継ぎながら、スコットランドのタペストリー文化の歴史を刻んでいる。

2. 「ウィリアム・モリスとフランク・ロイド・ライト」(藤田治彦)

2 番目の発表では、イギリス・アメリカ・日本を繋ぐアーツ・アンド・クラフツ運動の広がりの様子が語られた。

ウィリアム・モリス逝去の 1896 年頃から、アメリカ合衆国ではモリスとアーツ・アンド・クラフツ運動への興味が高まり、1897 年にはボストンとシカゴにアーツ・アンド・クラフツ協会が創設され、その他の都市にも同様の協会が開設されていった。シカゴが中心の中西部での住宅建築の設計施工で注目され始めた若手の建築家、フランク・ロイド・ライト (Frank Lloyd Wright, 1867-1959) は、シカゴ・アーツ・アンド・クラフツ協会創設メンバーの一員で、1901 年 3 月にシカゴ市内の二か所で「機械のアートとクラフト The Art and Craft of the Machine」を講演した。その講演内容は雑誌等にも出版されていた。「機械のアートとクラフト」でライトはジョン・ラスキンにも多少触れ、特にウィリアム・モリスに数多く触れている。イギリスのアーツ・アンド・クラフツ運動では、機械による制作は尊重していなかったが、ライトはモリスを重視しながらも、機械使用を否定的に見るイギリスのアーツ・アンド・クラフツ運動を疑問視した。ライトは、フィリップ・ウェップ設計のモリス夫妻の「赤い家 Red House」のように、魅力的な設計と建築材料使用の住宅を次々と建設し、モリス商会のように家具やステンドグラス等も設計、制作した。但し、伝統的ではなく、新しいデザインの建築や家具等を制作していった。

ニコラウス・ペヴスナーは世界的に最初の本格的デザイン史とも言える『モダン・デザインの展開 *Pioneers of Modern Design*』の副題を「ウィリアム・モリスからヴァルター・グロピウスまで *From William Morris to Walter Gropius*」としているが、グロピウス同様、あるいはグロピウス以上にモリスに興味を持っていた可能性のあるライトに注目し、「ウィリアム・モリスからフランク・ロイド・ライトまで」の研究の推進も重要であろう。ライトとグロピウスは、ル・コルビュジエ、ミース・ファン・デル・ローエとともに、20 世紀の四大近代建築家とされるが、その二人がともにモリスに注目していたことは興味深い。

本発表では「ウィリアム・モリスとフランク・ロイド・ライト」をテーマにして、モリスとライトの共通性と相違や、モリスからライトに至り、モリスを超えて展開して行ったライトにも注目して、国際的な運動の広がり様子を豊かな図像と共に跡付けた。

3. 質疑応答と全体ディスカッション

それぞれの発表のあと、質問や指摘が参加者から寄せられた。19 世紀のアーツ・アンド・クラフツ運動の中で採用された徒弟制度の実態や労働環境についての質問と意見交換、そして同じく 19 世紀に意識されるようになった conventionalization という概念について意見交換がなされた。

またこれらの二つの発表の後で、引き続き全体ディスカッションの場が設けられた。19 世紀もまた、様々な病に侵された世紀であり、病気や戦争によって孤児が急増した中からモリス商会に雇われる子供たちもいたという事実があらためて指摘され、パンデミック禍のただ中にある私たちの現状との相似性について話し合われた。また、スコットランドのスポーツ文化の研究者からのスコットランド経済に対するコメントの提供など、専門領域を超えた意見交流の場が提供され、実り多い研究会となった。